

## 令和4年度リンダウ・ノーベル賞受賞者会議 参加報告書 兼 アンケート

参 加 会 議： 第7回会議(経済学分野)

所属機関・部局・職名： オーフス大学・経済学部・助教授

氏 名： 足立大輔

1. ノーベル賞受賞者の講演を聴いて、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。〔全体的な印象と併せて、特に印象に残ったノーベル賞受賞者の具体的な氏名(3名程度)を挙げ、記載してください。〕

全体を通して、多くの受賞者が、過去の研究ではなく、現在の自分の最新の研究を短い時間の中で深く紹介することに注力していた点が印象的だった。まず、現在も大家が文献のフロンティアを精力的に広げていっていることに感服の念を抱き、次に30分という短い時間の中でわかりやすいプレゼンをするスキルを吸収したく思って聞いていた。

具体的には、ポール・ミルグロム氏の講演において、複雑な水の所有権に関する外部性の問題をクリアに概念化している点に感銘を受けた。自分は実証経済学者であり、問題の概念化には通常データを用いて理論からのアノマリーを探す手法をとるが、理論経済学者が直面する、データがない中で尤もらしい概念の抽出、モデルへの落とし込みという問題を垣間見ることができ、その一つの極地と言えるミルグロム氏の研究に触れることができた。この経験は、自分の今後の研究活動の中でも、問題の概念化とモデル化の際に一つの目標として心に持っておきたいと考えた。

また、クリストファー・ピサリデス氏の講演の中で、いかに不平等のデータの中から社会の問題やその解決案をラフに導き出すかの道筋の見せ方も大変参考になった。実証経済学者はえてして詳細なマイクロデータの分析に終始することが多くあると思うが、彼のように、大きな視座を見失うことなく研究を進めていきたいと考えた。

2. ノーベル賞受賞者とのディスカッション、インフォーマルな交流(食事、休憩時間やエクスカーション等での交流)の中で、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。[全体的な印象と併せて、特に印象に残ったノーベル賞受賞者の具体的な氏名(3名程度)を挙げ、記載してください。]

全体的に、ノーベル賞受賞者も人間であり、直接の交流の機会において、本や講演で知ることのできない生の姿を捉えたいと考えて会議に出席した。残念ながら、多くの受賞者とディスカッションすることはできなかったが、それでも有益な体験をいくつか得ることができた。

クリストファー・ピサリデス氏とのランチの中で、経済学ジャーナルの査読の問題点に触れていた点が印象的だった。彼は具体的な解決法として、時間付きのインセンティブを査読者に与えることを提唱しており、イシューベース、解決法ベースの考え方をする非常にプラクティカルな人間であるということに感銘を受けた。また、前日に行った私の講演の内容を覚えていただき、いくつか有益なコメントをいただくことができた。

オリバー・ハート氏とのインフォーマルディナーの中では、多くの思考実験を議論しながら行った。彼は忍耐強く学生のアイデアを聞いており、広くアイデアを募ることの重要性を実感することができた。

3. 諸外国の参加者とのディスカッション、インフォーマルな交流の中で、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。

諸外国の参加者は非常に活発であり、ノーベル賞受賞者やその他の参加者とのディスカッションを通じて多くを学ぶことを目標としていた。特に、私自身、Next Gen Sessiond で自分のロボットと労働市場に関する研究を発表する機会を得ることができたが、それに関する反響が多く、自分の研究に関する理解を深める非常に有意義な議論ができた。また、ここで得られた人的ネットワークはお互いにとって非常に有益で、例えば今後のセミナーへの招待などのルートを通じて、自らの研究の質を高めていくことができると確信している。

4. 日本からの参加者とのディスカッション、インフォーマルな交流の中で、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。

日本からの参加者は、旧知の方と新しく知り合った方がいらっした。特に私は海外の研究機関に所属しているため、日本のトップの若手研究者の方と知り合う機会は少なく、彼らと自身の研究や所属先での業務について話し合うことができたことは、私の今後の研究やキャリア形成の上でかけがえのないものとなった。

5. 特に良かったと思うリンダウ会議のプログラム(イベント)を3つ挙げ、その理由も記載してください。

Laureate Lunch では、事前に選んだ受賞者を参加者 10 人程度で囲んで、レストランでランチをすることができた。上記でも書いたが、私はクリストファー・ピサリデス氏とランチをすることができ、日常業務から研究の内容に至るまで、様々な刺激を得ることができた。

Next Gen Sessions では、参加者のうち希望し、採用されたものがノーベル賞受賞者 2,3 名程度を前にして自身の研究発表をすることができた。私はマクロ・労働セッションで発表することができ、自身の研究を広く知ってもらうほか、他の若手トップの参加者の最新の研究を知ることができ、非常に刺激的な時間となった。

最終日金曜日の Bavarian Night では、参加者が自分の文化的な服装をすることを奨励され、華やかな雰囲気の中で交流を深めることができた。

6. その他に、リンダウ会議への参加を通して得られた研究活動におけるメリット[具体的な研究交流の展望がもてた場合にはその予定等を記載してください。]

上記でも書いたが、参加者とのネットワークを構築できたことが大きいと感じる。私の研究報告ののち、同年代の参加者5名程度から話しかけていただくことができた。出身地もヨーロッパのみならずアジア・北米・南米と広い地域の方と交流・意見交換をすることができた。今後もこのネットワークを通じて、セミナーへの参加・招待や、将来的には共同研究をすることを期待したい。

7. リンダウ会議への参加を通して得られた上記の成果を今後どのように日本国内に還元できると思うか。

まず、このような素晴らしい会への参加をご支援いただき、大変感謝申し上げます。日本国内においては、まず何より、今回得られた知見や研究活動上のメリットを最大限に活かし、国内外に大きな影響をもたらす良い研究をすることで還元してゆきたい。また、機会があれば、このような素晴らしい機会があることを後輩の研究者に広く周知してゆきたいと思う。

8. 今後、リンダウ会議に参加を希望する者へのアドバイスやメッセージ

リンダウ会議では、普段会うことの出来ない素晴らしい受賞者・参加者と非常に身近な交流ができる。そのための時間がとても贅沢に準備されており、何を体験し、吸収して持って帰りたいか、事前に考えておくことにより、その時間を最大限活用できるように思う。リンダウ会議で大きな収穫と、将来の研究へのモチベーションを養っていただきたい。

(以上の記載内容は、氏名と併せて日本学術振興会ウェブサイトに掲載されます。)